

□ 第9回川崎病全国調査成績

柳川 洋, 中村好一, 屋代真弓, 藤田委由¹⁾
川崎富作, 今田義夫, 麻生誠二郎²⁾

要約 100床以上の病院で小児科を併設する2,339施設に1985年1月～1986年12月の2年間に受診した川崎病初診患者を対象に全国疫学調査を実施した結果, 以下の成績を得た。

- 1 1,516施設(64.8%)より回答が得られ, 報告患者数は20,458人(1985年7,611人, 1986年12,847人)であった。
- 2 1985年12月～1986年5月にかけて大規模な流行がみられた。流行は関東地方からはじまり周辺に広がった。
- 3 年齢別罹患率は0歳後半から1歳にかけて1峰性のピークを有し, 男女比は1.4である。
- 4 γ-グロブリンの治療を受けたものの割合が年次とともに増加し, 1986年には38.6%になっている。
- 5 2年平均の同胞例ありの割合は1.8%, 再発例3.7%, 死亡例0.14%, 心後遺症例16.8%であった。

見出し語: 川崎病 全国調査, 疫学

はじめに 1970年に第1回川崎病全国調査が実施された。それ以来合計8回の全国調査が行われ, 1984年12月末までの患者が把握されていたが,¹⁾ 今回1985年1月～1986年12月の2年間における初診患者を対象とした第9回全国調査の集計解析が完了したのでその概要を報告する。

研究方法 第9回全国調査は1985年1月1日より1986年12月31日の2年間に小児科を併設する100床以上の病院を受診した川崎病初診患者を対象にした。調査を依頼した施設数は2,339カ所である。1984年9月に川崎病研究班は「川

崎病診断の手びき」を改訂したので, 前回の第8回全国調査からこの改訂版(改訂4版となった)によって症例の報告を依頼した。「川崎病診断の手びき」の改訂第3版までは6項目の主要症状のうち5項目が認められる場合を川崎病として取り扱ったが, 前回の第8回全国調査より患者の枠を幾分拡げて4項目のみ認められる場合でも冠動脈瘤の存在が確認されれば患者として扱うことにした。²⁾ しかし, 実際にはこのような症例の頻度は少なく, 第8, 9回全国調査で得られた症例と第7回までの全国調査で得られた症例とは本質的には殆ど差がないと考えられる。

1) 自治医科大学公衆衛生学教室 (Dept. of Public Health, Jichi Medical School)

2) 日本赤十字社医療センター小児科 (Dept. of Pediatrics, Japan Red Cross Medical Center)

調査結果 1. 回収率

調査を依頼した施設2,339カ所のうち、1,516施設(64.8%)から回答が得られた。報告された患者数は1985年に7,611人、1986年に12,847人の計20,458人であった。

2. 年次推移

過去8回の調査で報告された患者も含めると83,857人になる。年次推移をみると表1、図1

に示すように男女とも1970年ごろから患者は着実な増加傾向を示している。とくに1979年には1.7倍の患者が発生し、明らかな流行と考えられた。しかし、1985年も患者数は7,000人以上で1979年の流行時の水準よりも高い値であった。

今回の調査で新たに28名(1985年10名、1986年18名)の死亡患者が報告され、過去の

表 1 性別患者数、罹患率、死亡数、致命率の年次推移

(第1回～第9回全国調査)

年 次	患 者 数			0～4歳10万対罹患率			死亡例 (致命率%)
	計	男	女	計	男	女	
～1964	88	58	30	1.1	1.4	0.8	—
1965	61	33	28	0.7	0.8	0.7	—
1966	79	49	30	1.0	1.2	0.9	—
1967	101	60	41	1.2	1.4	1.0	2(2.0)
1968	310	177	133	3.7	4.1	3.2	6(1.9)
1969	461	281	180	5.3	6.3	4.3	9(2.0)
1970	887	527	360	10.1	11.8	8.4	10(1.1)
1971	804	481	323	8.6	10.1	7.1	12(1.5)
1972	1,135	658	477	11.9	13.4	10.3	16(1.4)
1973	1,524	928	596	15.4	18.3	12.4	35(2.3)
1974	1,963	1,157	806	19.6	22.4	16.6	20(1.0)
1975	2,216	1,332	884	22.2	26.1	18.1	16(0.7)
1976	2,337	1,406	931	23.7	27.9	19.4	16(0.7)
1977	2,798	1,706	1,092	29.1	34.6	23.4	18(0.6)
1978	3,459	2,064	1,395	37.4	43.5	31.0	14(0.4)
1979	6,867	3,987	2,880	77.5	87.5	66.8	38(0.6)
1980	3,932	2,317	1,615	45.9	53.0	38.6	8(0.2)
1981	6,383	3,677	2,706	77.8	87.3	67.7	16(0.3)
1982	15,519	8,762	6,757	194.7	214.2	174.1	49(0.3)
1983	5,961	3,441	2,520	77.3	86.9	67.1	17(0.3)
1984	6,514	3,790	2,724	85.4	96.8	73.3	19(0.3)
1985	7,611	4,430	3,181	102.0	116.0	87.4	10(0.1)
1986	12,847	7,249	5,598	172.2	189.8	153.8	18(0.1)
計	83,857	48,570	35,287	42.0	47.5	36.3	349(0.4)

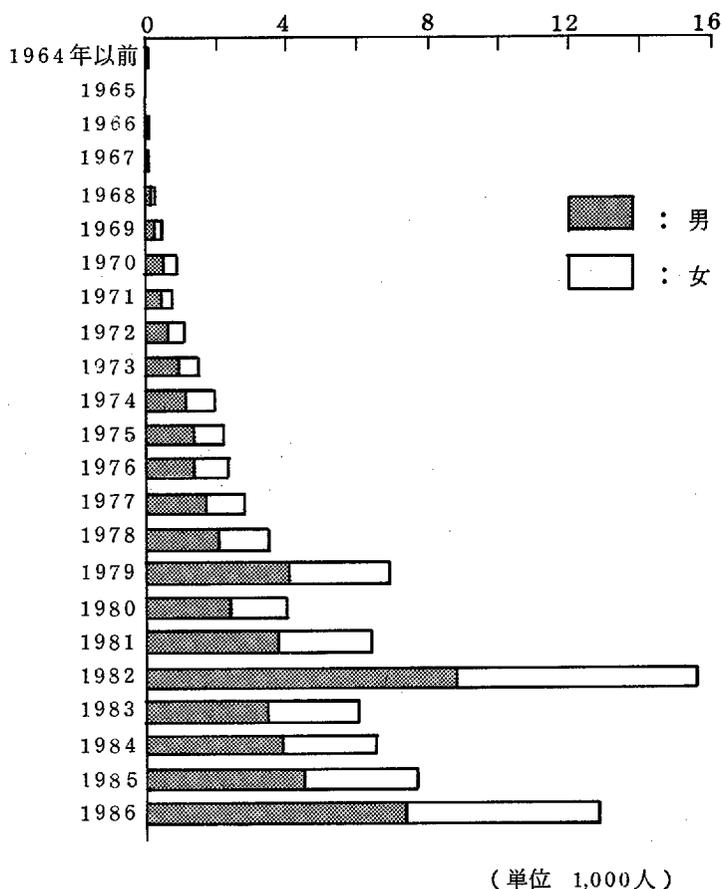


図 1 年次別・性別発生数(第1回～第9回全国調査)

症例を合わせると合計349人になり、致命率は0.4%である。1974年頃までは死亡例が報告患者の1%以上を占めていたが、1975年以後低下し、1980年以後はコンスタントに0.3%前後の値を示していた。今回の調査対象になった1985年、1986年は共に0.1%の低率になっている。

3. 性比

今回報告された2年間の患者数は男11,679人、女8,779人で、性比は1.4である。性比は過去ほぼ一定の値を維持してきたが、流行年の性比は縮小する傾向がみられる。(例：1982年、1986年は1.3である。)

4. 月別発生

第5回全国調査から今回の第9回調査までの10年間(1977～1986年)について月別発生数を見ると、図2に示すように1979年3～5月、1981年12～1982年2月、1982年3～6月、1985年12月～1986年5月に患者数の増加がみられる。1985年12月からの増加は1982年3～6月の流行に匹敵する大規模な流行である。そのほかに1981年5～7月、1984年3～6月にも小さな山がみられる。また図には示していないが、1984年の山は東京および関東に目だって高い。

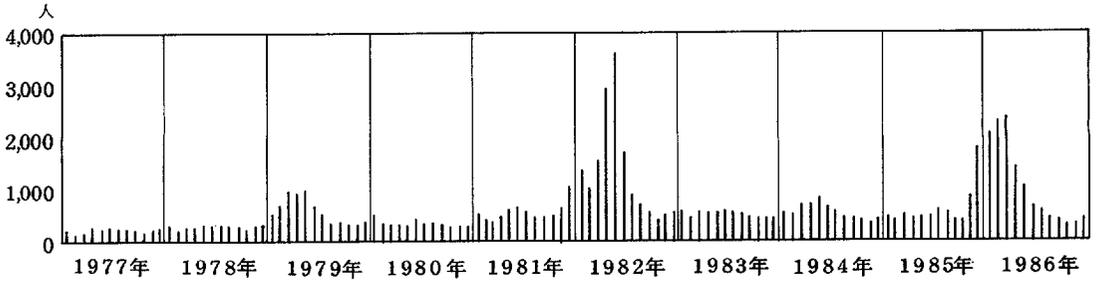


図 2 年次別・月別発生数(第5回~第9回全国調査)

5. 年齢別罹患率

図3は1985年、1986年の性別年齢別罹患率(両年共人口は1985年の国勢調査人口を用いた)を示す。罹患率は9~11月にピークになり、1985年は人口10万対男238.3、女178.9、

1986年は男435.5、女344.6である。両年とも1峰性のカーブを示し、4歳未満の患者は全体の85.5%を占めている。また0歳後半から1歳前半にかけて男女差が開いている。

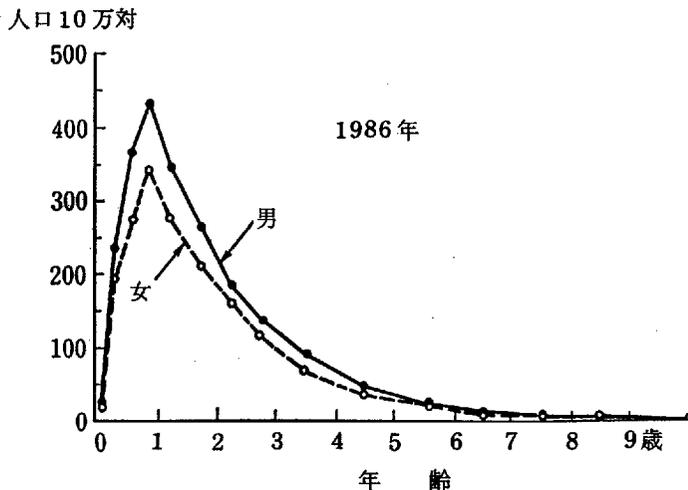
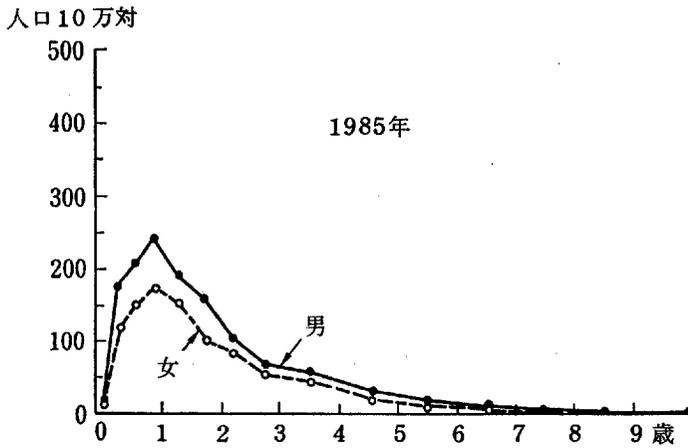


図 3 性別・年齢別罹患率(第9回全国調査)

6. 都道府県別罹患率

図4は2年間の都道府県月別患者報告数を立体図に示したものである。1985年11月から1986年6月にかけて大部分の都道府県で大きな山脈を形成し、全国的な流行がみられた。また、山脈形成時期は関東の都県で最も早く、周辺に行く程時間的なずれがみられた。県によっては殆ど増加のみられないところもあった。

7. 治療状況

治療薬剤の使用状況を前回の調査で得られた1982年～1984年の数字と比較すると、表2に示すようにステロイド治療を受けたものは9.6%から4.5%に低下している。アスピリン治療を受けたものは各年とも90%前後で殆ど変化がみられない。抗生物質の投与を受けたものも60%前後でほぼ一定である。γ-グロブリンの治療を

受けたものは1982年にはわずか2.5%であったが、年次とともに上昇し、1986年には38.6%になっている。

8. 同胞例, 再発例, 死亡例, 心後遺症例の出現状況

1985年、1986年の2年平均で同胞例ありのものは1.8%、再発例は3.7%の患者にみられた。表3に示すように同胞例ありの患者割合は流行年の1982年、1986年に高い。再発例の割合は逆に流行年に低い傾向がみられる。死亡例の割合は1982年の0.32%から1986年の0.14%まで順調に減少している。心後遺症の出現率(「発病1カ月以降に冠動脈拡大(動脈瘤を含む)、狭窄(閉塞を含む)、心筋梗塞または弁膜病変の認められること」と定義した。)は16.5%～18.0%の範囲でほぼ一定の値を示した。

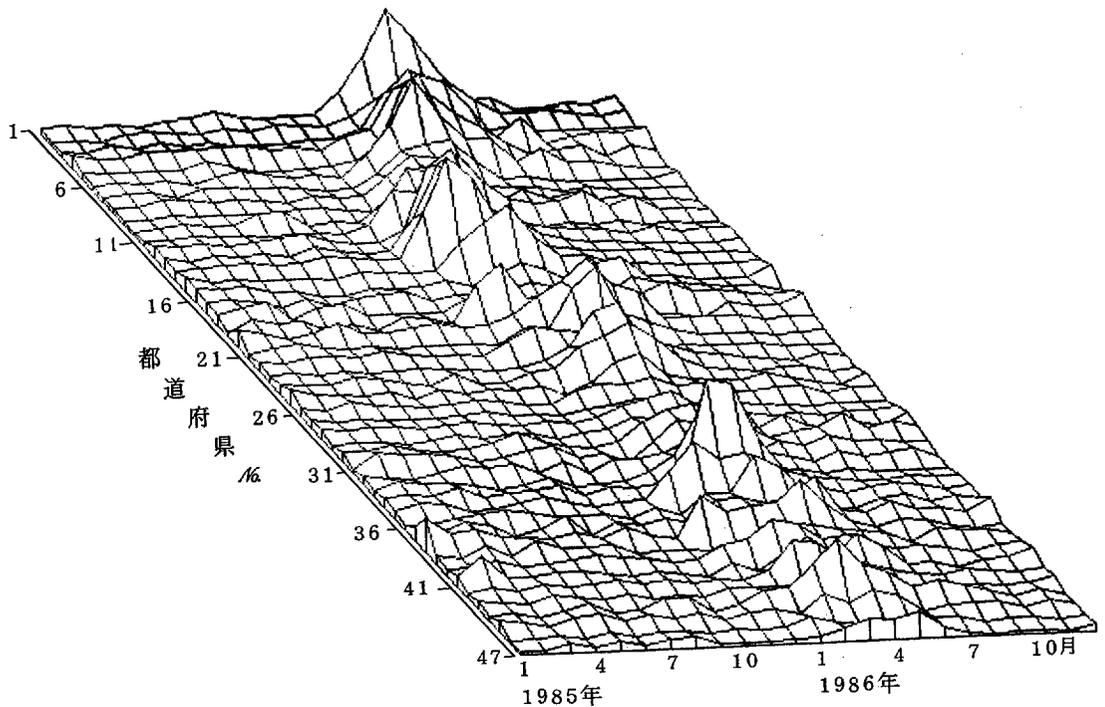


図 4 都道府県別・月別患者報告数立体図

表 2 治療薬剤の使用状況(%) (第8回, 第9回全国調査)

	1982年	1983年	1984年	1985年	1986年
ステロイド	9.6	6.3	4.9	5.5	4.5
アスピリン	91.7	89.7	89.2	92.9	93.8
抗 性 物 質	61.9	57.0	58.3	60.5	61.5
γ-グロブリン	2.5*	8.2	19.1	33.5	38.6

* 1982年7~12月

表 3 同胞例, 再発例, 死亡例, 心後遺症例の出現状況(%) (第8回, 第9回全国調査)

	1982年	1983年	1984年	1985年	1986年
同 胞 例	2.1	1.3	1.4	1.6	1.9
再 発 例	3.1	4.4	3.5	4.3	3.0
死 亡 例	0.23	0.29	0.29	0.13	0.14
心 後 遺 症 例	16.5*	16.7	18.0	16.6	17.0

* 1982年7~12月

図5, 図6は同胞例および再発例の割合を性年齢別にみたものである。同胞ありの割合では性、年齢差はほとんどみられなかったが、再発例の割合は4歳以上の年齢で高く、女に比べて男がやや高い傾向がみられた。

図7は性年齢別致命率を示す。性差としては1

歳, 2歳で若干男が多いようであった。年齢別にみると男女とも0歳のものが最も高い。

心後遺症の出現率は図8に示すように性別では男が女に比べて高い。年齢別では0歳のものが最も高く、年齢増加に伴って低下した後わずかに上昇の傾向がみられる。

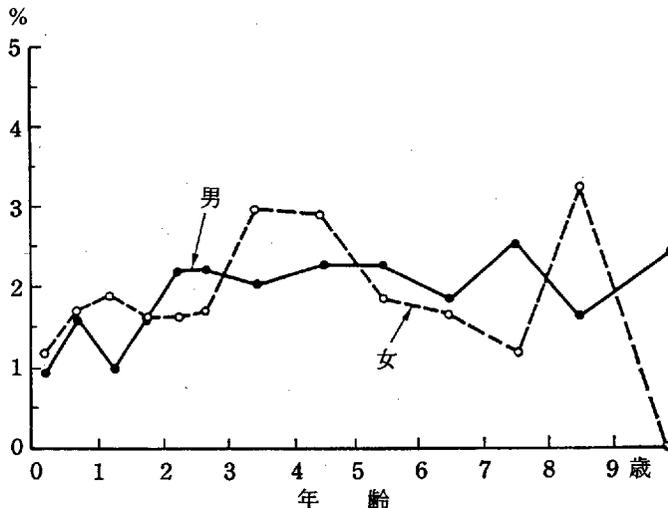


図 5 性別・年齢別同胞例ありの割合 (第9回全国調査, 1985, 1986年平均)

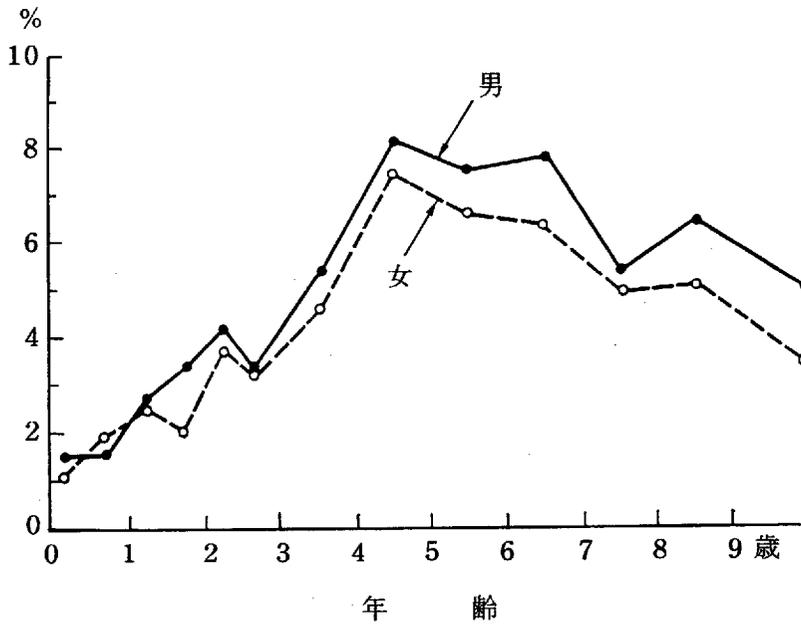


図 6 性別・年齢別再発例の割合
(第9回全国調査, 1985, 1986年平均)

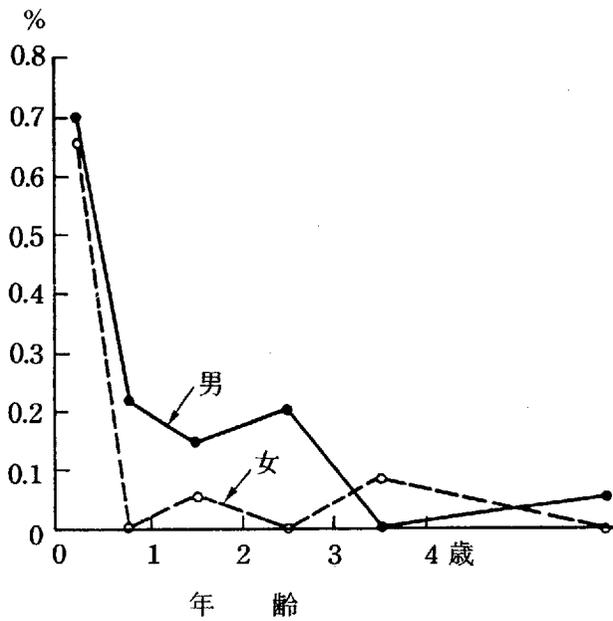


図 7 性別・年齢別致命率
(第9回全国調査, 1985, 1986年平均)

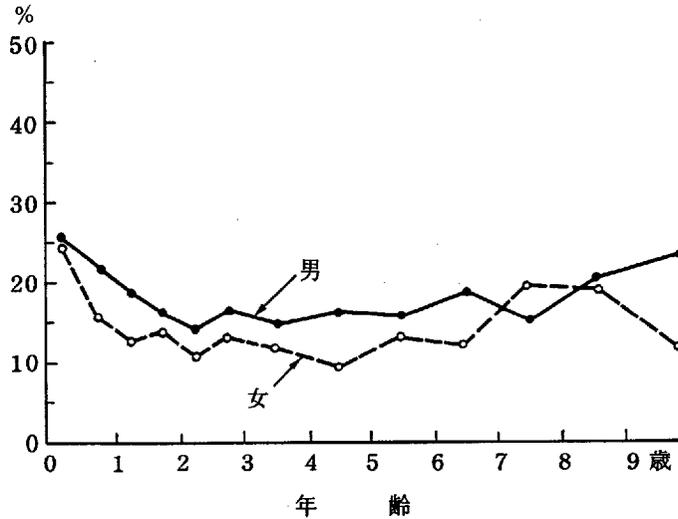


図 8 性別・年齢別心後遺症出現率
(第9回全国調査, 1985, 1986年平均)

文 献

1) 柳川 洋：川崎病の全国調査成績，川崎病疫学データのすべて（日本心臓財団川崎病原因究明委員会編），P. 37-51，ソフトサイエンス社，東京，1986。

2) 厚生省川崎病研究班：第8回川崎病全国調査成績，小児科，26(9):1049-1052，1985。

Abstract

Results of the 9th Nationwide survey on Kawasaki disease in Japan
Hiroshi Yanagawa, Yosikazu Nakamura, Mayumi Yashiro and Yasuyuki Fujita¹⁾
Tomisaku Kawasaki, Yoshio Imada and Seiji Aso²⁾

The statistical analysis of the 9th nationwide survey for the patients with Kawasaki disease who were diagnosed within a 2-year period, from January 1985 to December 1986, at the department of the pediatrics of hospitals having 100 or more beds was recently completed. The summary of the results are as follows.

1. The number of cases reported in this survey was 20,458 (7,611 in 1985 and 12,847 in 1986). The cumulative number of patients including the patients reported in the previous 8 surveys was 83,857 (48,570 males

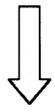
and 35,287 females, M/F ratio=1.4)

2. A big epidemic was seen from December 1985 to May 1986, starting from Kanto districts and propagated to surrounding area.

3. A curve plotted for age-specific incidence rate shows a unimodal peak at age 1 year.

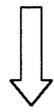
4. Proportion of patients with γ -globulin treatment increased recently (38.6% of all patients in 1986) .

5. The proportions of sibling cases, recurrent cases and heart sequelae cases were 1.8%, 3.7% and 0.14%, respectively, of all cases reported.



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



要約 100床以上の病院で小児科を併設する2,339施設に1985年1月～1986年12月の2年間に受診した川崎病初診患者を対象に全国疫学調査を実施した結果、以下の成績を得た。

- 1 1,516施設(64.8%)より回答が得られ、報告患者数は20,458人(1985年7,611人,1986年12,847人)であった。
- 2 1985年12月～1986年5月にかけて大規模な流行がみられた。流行は関東地方からはじまり周辺に広がった。
- 3 年齢別罹患率は0歳後半から1歳にかけて1峰性のピークを有し、男女比は1.4である。
- 4 γ -グロブリンの治療を受けたものの割合が年次とともに増加し、1986年には38.6%になっている。
- 5 2年平均の同胞例ありの割合は1.8%、再発例3.7%、死亡例0.14%、心後遺症例16.8%であった。